

東日本視察交流記（9） 「東日本大震災・農業漁業復興共同体」と会う
6月13日（月）（その2）

正午ごろ、同じ鹿島台の、第2の訪問先「ダイアファーム」に着いた。社長の阿部さんが明るく迎えてくれた。阿部さんは、米を中心に生産販売の会社を経営しているとともに、宮城県農業法人協会の会長のほか大崎市、農協の役職をし、幅広く活動している。

ほかに3名の方がおられた。「東日本大震災・農業漁業復興共同体」を結成して活動している小原田さんたちであった。小原田さんは石巻市で農業をしており、津波が家の床上まで来て大規模半壊、ハウス全壊、農機具全損の被害を受け、1か月以上避難所にいた。宮城県青年農業士会の会長であり、今回「東日本大震災・農業漁業復興共同体」を結成し、代表幹事、事務局本部を引き受けている。宮城県が地元の意見を十分聞かずに復興を進めようとしているのが気付きである、という。

瀧田さんは「共同体」事務局長。ホテル産業で仕事をしているが、それを進める上でも、被災地の第1次産業の復興がきわめて手薄なので東京からここにきてこの活動をしている。久野さんはそのパートナー事務局員である。

いま宮城、岩手、福島の3県の交流を進め、政府の第2次、第3次の補正予算にむけて働きかけていこうと活動を進めている、という。



私たちが思っていることを被災地のまんなかでやっている、ほんとうに心強いと思った。こんな方々に会えるとは夢にも思わなかったし、それだけに、忙しいなか私たちに会いに来てくれたこと、またそれを仲介してくれた阿部さんの心遣いが心に染みた。



阿部さんが「うちで作った弁当を食べながらお話をしましょう」といい、昼食になった。阿部さんはファームの産物を使ってお弁当会社も経営しているのだ。

あまりに見事なお弁当だったので、写真を撮った。おいしかった。

1時間ほどの短い時間だったので、十分な意見交換はできなかったが、これからも連絡をとりあいましょう、ということで有意義な会合を終えた。

後日、インターネットで下記のような記事（6月11日付）をみつけた。ちょうどお会いしていたころのものである。

東日本大震災で津波被害を受けた田んぼを再生しようと、農家や農業法人などでつくる団体が2日、宮城県石巻市の北上地区にある水田で実験を始めた。土に薬剤を混ぜ、塩分や油分をどれだけ除去できるか約1カ月後に分析し、来年の作付け再開に活用したい考えだ。実験に臨んだのは、岩手と宮城、福島各県で農業に従事する約500の個人・団体から成る「東日本大震災・農業漁業復興共同体」。

北上川沿いにある石巻市北上地区では、約300ヘクタールの水田の大半が津波被害を受け、塩分や油分を含んだヘドロが深いところで約70センチ堆積している。実験は、塩分を吸着させるホタテの粉末と、油分を分解させる植物性の油脂、活性炭を混ぜた薬剤を使った。ホタテは地元の三陸産を使っているという。